

## ○11 七尾湾奥部の三引遺跡における縄文時代前期初頭貝塚出土の 海生哺乳類遺体

○平口哲夫(金沢医科大学)・金山哲哉(石川県埋蔵文化財センター)

Marine mammal remains excavated from the earliest Early Jomon shell midden, ca. 6000 BP, at the Mibiki site deep in the Nanao Bay.

Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University), and Tetsuya Kanayama (Ishikawa Archaeological Foundation)

石川県田鶴浜町三引の能越自動車道建設予定地には、1992年に石川県立埋蔵文化財センターが行った試掘によって縄文時代から近世にわたる多数の遺跡があることがわかり、1994年から本格的な発掘調査が開始された。1995年度第2次調査では縄文時代前期初頭の貝塚が発見され、以来、'96年度第3次調査・'97年第4次調査〔社〕石川県埋蔵文化財保存協会、'98年度第5次調査・'99年度第6次調査〔財〕石川県埋蔵文化財センターを経て、貝類・魚類・哺乳類など多数の動物遺体資料がもたらされた。これらの動物遺体ならびに出土人骨については、事実報告編が刊行されており(山口・金山・平口・山川・茂原・櫻井・江田・パリノサーヴェイ、2004)、また研究報告編の刊行が準備中である。

第2次～第6次調査出土の動物遺体のうち、第6次調査10区出土の哺乳類5,711点について破片法により組成を試算したところ、シカ4,341点(76.0%)、イノシシ590点(10.3%)、イヌ222点(3.9%)、その他の小型陸獣類74点(1.3%)、イルカ類427点(7.5%)、鯨脚類57点(1.0%)という結果を得た。この数値は、同定作業が完了していない段階での、ある仮定に基づく試算であるが、圧倒的にシカが多く、イノシシ・イルカ類が第2・第3位を占め、海生哺乳類は哺乳類全体の10%に満たないという結果は、おおよその傾向を示すとみてよいだろう。

海生哺乳類であることが確実な資料1,689点のうち、鯨類またはその可能性の高いもの1,542点(91.3%)、鯨脚類またはその可能性の高いもの147点(8.7%)を数える。鯨類遺体のうち、小型イルカまたはその可能性の高いもの988点(77.0%)、中型イルカまたはその可能性の高いもの228点(17.7%)、大型イルカまたはその可能性の高いもの67点(5.2%)、合計1,283点。小型イルカ遺体のうち、マイルカまたはその可能性の高いもの100点、カマイルカまたはその可能性の高いもの41点、合計141点。中型イルカ遺体のうち、ハンドウイルカと同定することができたもの59点。大型イルカ遺体のうちオキゴンドウと同定することができたもの2点。鯨脚類遺体のうち、アシカまたはその可能性の高いもの41点、トドまたはその可能性の高いもの23点、合計64点。すなわち鯨類ではマイルカ・カマイルカ・ハンドウイルカ・オキゴンドウの4種、鯨脚類ではニホンアシカ・トドの2種が同定されており、このうち最も多いのがマイルカである。

外洋性といわれるマイルカが、七尾湾の最奥に位置する三引遺跡から、弱外洋性といわれるカマイルカよりも多く出土しているのは興味深い。この現象は、富山湾の最奥に位置する氷見市朝日貝塚においても認められる。富山湾は深い海が沿岸近くまで迫っているの、魚群を追って湾に回遊してきたマイルカがおのずと湾の奥まで入り込んでしまったところを、縄文人によってさらに小湾や入江に追い込まれて捕獲されたものと考えられる。真脇遺跡では、イルカの主体をなすカマイルカにたいしては、ある程度追い込んでから槍で突いて捕ったと考えられるが、これとちがってマイルカは、通常の追い込み漁で捕獲しやすい種類であることから、長年にわたる乱獲ならびに海洋環境の悪化によって生息数が減少してしまい、現在では沿岸に近寄ることはまれになってしまったのであろう。